


令和5年度
中学生の主張
東京都大会
発表文集

中学生の主張東京都大会HP



※発表文集の電子版・
大会当日の動画を
公開しています。

 東京都



発表者の皆さん



奨励賞受賞者の皆さん

大会の様子



開会あいさつ



発表者紹介



発表・審査の様子



審査員長より結果発表・講評



表彰状贈呈の様子



知事賞受賞者による感想

目次

- 1 開会あいさつ
- 2 発表者及び各賞

知事賞

- ・ 人生の通過点？

～十代 (adolescence) の自分と向き合うか～

吉祥女子中学校 二年 山中彩帆里 …………… 4

東京都教育委員会賞〔氏名五十音順〕

- ・ ことば溢れる社会を目指して
- ・ 防災への意識

都立武蔵高等学校附属中学校 三年 神村雛子 …………… 5

都立桜修館中等教育学校 三年 堤川琉凧 …………… 6

優良賞〔氏名五十音順〕

- ・ 会話の本質
- ・ 祖父から教わった農業
- ・ 僕の将来の夢
- ・ SNSと気持ちのコントロール
- ・ 「青春取扱説明書、規則改正を添えて」
- ・ 心を彩る年中行事
- ・ 「いじめ」と向き合う「人」と向き合う

都立桜修館中等教育学校 三年 小林杏珠 …………… 7

立川市立立川第四中学校 三年 近藤寧々 …………… 8

葛飾区立本田中学校 一年 櫛山瑠斗 …………… 9

立川市立立川第一中学校 二年 三島穂紀 …………… 10

十文字中学校 一年 毛利日鞠 …………… 11

都立武蔵高等学校附属中学校 三年 吉川鳴海 …………… 12

あきる野市立増戸中学校 二年 渡邊一太 …………… 13

東京都生活文化スポーツ局若年支援担当部長 村上章 …………… 3

奨励賞 (氏名五十音順)

・あいさつは大切？	杉並区立井荻中学校	一年	赤塚真柚人	14
・8月9日	晃華学園中学校	三年	池田華	15
・障害ではなく特性です	立川市立立川第五中学校	二年	石川嵩人	16
・うつ病について	都立桜修館中等教育学校	三年	石田ひなた	17
・私たちが変わっても変わらないもの	都立大泉高等学校附属中学校	一年	市川芽奈	18
・地域活動から学ぶこと	立正大学付属立正中学校	一年	井福幸多朗	19
・真実の日本	都立武蔵高等学校附属中学校	三年	小俣百合	20
・「偏見」という大きな壁	都立桜修館中等教育学校	三年	河田凜子	21
・見えない世界	都立桜修館中等教育学校	三年	原田心夏	22
・インクルーシブ教育を目指して	葛飾区立水元中学校	二年	山田りる	23
3 審査員長講評	十文字学園女子大学教授		富山哲也	24
4 最終審査員の感想				25
5 令和5年度 中学生の主張東京都大会 当日の概要				27
6 【参考】令和5年度 中学生の主張東京都大会 募集概要				28
7 応募状況				29
8 過去の入賞者(直近3年間)				30
9 令和5年度 中学生の主張東京都大会の動画配信				31

(※掲載作品については、誤字・脱字以外は原文のまま掲載しました。)

東京都生活文化スポーツ局若年支援担当部長

村上 章

東京都生活文化スポーツ局若年支援担当部長の村上でございます。

「令和5年度 中学生の主張東京都大会」の開会にあたり、一言御挨拶を申し上げます。

はじめに、本日発表される生徒の皆さん、本大会への出場、誠にありがとうございます。

この大会は、中学生が広い視野と柔軟な発想を持ち、自らの考えを論理的に伝える力を身に付けることを目的として、昭和54年から開催しており、今回で45回目となります。

今年度も、大変多くの作品応募がございまして、五、二九七名の中学生の皆さんから素晴らしい作品が届けられております。

作品には、社会的な課題をはじめ、日常で感じた疑問や友人関係などについて、様々な視点から、生徒自身の思いや考え、今後取り組んでいきたいことなどが生き生きとつづられており、本日はその中から、事前審査で選ばれた10名の皆さんに発表いただきます。

発表者の皆さんお一人一人の想いのあふれた素晴らしいスピーチとなることを期待しています。

また、本日の発表を経て決定する、最優秀賞である知事賞受賞者は、今年11月に国立青少年教育振興機構が主催する「少年の主張全国大会」の東京都代表として推薦されることとなります。

この大会を通して、中学生の皆さんには今後も様々なことに関心を持ち、広い視野と柔軟な発想を持って自己や社会と向き合いながら、未来の東京、未来の世界を切り拓いてほしいと願っています。

結びに、本大会の開催にあたり、審査員の皆様、学校関係の方々をはじめ、多くの皆様に多大な御支援をいただいたところでございまして、この場を借りまして厚く感謝を申し上げます、開会の挨拶とさせていただきます。

本日はどうぞよろしくお願いいたします。





吉祥女子中学校 二年

山中彩帆里

人生の通過点？

～十代 (adolescence) の自分とどう向き合うか～

「最近、何か寂しいな。」

朝、学校に行くため私がそそくさと支度をしていた時、お弁当を渡してくれた母が発した言葉でした。小学生の時の私は、いわゆる「いい子ちゃん」でした。学校に行く時には私の姿が見えなくなるまで家の前で見送ってくれる母に少なくとも二度振り返って手を振り、夜寝る時には「おやすみ。いつもありがとう。大好き！」と母に言ってから寝室に向かったりしていました。その事を友達に言うと、「さほって偉いね！普通、恥ずかしくて言えないよ。」と言われるような子でした。しかし、中学生になった今、私は「いい子ちゃん」ではありません。朝見送ってくれる母に手を振らなかつたり、夜寝る時にも「おやすみ。」しか言わなかつたりという具合です。私が母親だったら、そんな娘の態度の変化で接し方が冷たくなってしまおうと思います。ですが、私の母は「最近疲れてるの？」などと以前に増して優しく、心配してくれます。そんな母に「最近、なんか寂しいな。」と言われた時、正直な母がそう言ったのか分かります。その日の夜、習い事のお迎えに来てくれた父にその話をしたところ、「最近彩帆里が家を出る時に手を振ってくれなかつたり、寝るときに『いつもありがとう！』って言ってくれなかつたりするからお母さん寂しいらしいよ。」と聞かされた私は、内心衝撃を受けましたが、「だってもう中学生だからしょうがないじゃん！」と言い返してしまいました。

自分がこんな風にならなくなってしまったのは何故だろうか？自分が自分でない、そんなことを考えていた時に出会った言葉が「adulthood」という言葉でした。「adulthood」は英語で「思春期」のことです。日本語の「思春期」という言葉をなんとなく受け入れ難い私にとって、語源のラテン語で「成長する」という意味を持つ adulthood は自分を客観的に見ることでできる魔法のような言葉でした。

adulthood には主に前期（十一歳～十四歳）、中期（十四歳～十七歳）、後期（十七歳～十九歳）があるそうです。現在十四歳の私は丁度、前期の終わりから中期に差し掛かる時期にあり、私は少なくともあと五年間は自分に違和感をもつ時期を過ごすという事を意味しています。

今、私が感じている違和感は、家族への態度が冷たくなる、何か言われると否定されたように感じて言い返したくなる、の二つです。まず、家族への態度が冷たくなるというのは周りの人に家族と仲が良いところを見られるのが恥ずかしいという気持ちがあるからだと思います。次に、何か意見を言われると言い返したくなるのは「忠言耳に逆らう」と言われるように、ついつい素直に人の意見を聞けない所があるのです。皆さんもこれに似た感情を抱き、もどかしい思いをしたことがあるのではないのでしょうか。

私は、これからまだ数年間 adulthood の自分と向き合っていかなければいけません。それは、家族と仲良く接し、素直に感謝の気持ちを伝え、誰かに意見を言われたときには「そうだね。ありがとう。」と言い、相手を認める事でやり過ごせるのかもしれない。しかし、最近の自分の態度とギャップがあるせいでそのように振舞うのは容易なことではなく、家族に冷たくしてしまったり、言い返してしまつたりするといった日々から抜け出せないうです。それでも私は「現実の自分」から「理想の自分」に少しでも近づくことを目指し、「自分で認められる自分」になりたいです。

adulthood は誰もが通る人生の通過点です。しかし、これをただの通過点にしてしまうのは勿体無いと思います。この時期に感じ、悩んだ事を今後の人生の糧とできるよう、adulthood の自分の心と体の変化と向き合いながらこの先の数年間を過ごすしたいと思います。



都立武蔵高等学校附属中学校 三年

神村 雛子

ことば溢れる社会を目指して

私は、なにか驚いたときや感動したときによく言ってしまう口癖があります。「やばい」という言葉です。おそらく、現代を生きるほとんどの若者は意識しなくても勝手に口から出てくるようなものだと思います。

これは実に便利な言葉です。嬉しいとき、悲しいとき、怒っているとき、感心したときなど、いつどんな場面でも使えます。また、友達と「やばいね」と笑い合えるような言葉であると同時に、先生に対しても「やばいですよね」となんの違和感もなく話せる言葉でもあります。私も、一日に何度口に出しているかわかりません。それほど、ある意味親しみやすい言葉だといえます。

しかし、本当に全てを「やばい」で片づけてよいのでしょうか。

以前祖母の家に帰省した際に、出てきた夕食がとても美味しく、思わず「これ、やばいんだけど。」と言ってしまいました。もちろん、悪い意味ではなかったのですが、これを聞いた時祖母は少し戸惑った顔をしました。そして、「何がやばいの？」

と言ってきたのです。すごく美味しいってことだよ、と伝えても祖母の表情は変わらず、「それならおいしいって言ってよね。」

と言われてしまいました。その時は、祖母は現代でよく使われている言葉の意味をあまり知らないのかな、と思いました。しかし、最近になって祖母の気持ちがあ少し理解できるきっかけとなった出来事がありました。

ある休みの日、友達の誕生日で個人的にかわいいと思ったヘアアクセサリーを渡しました。その時に友達が、

「やばすぎる、ありがとう。」

と嬉しそうに言ってくれました。友達の喜んでいる顔を見て私も嬉しい気持ちになったし、渡して良かったとも思えました。しかし、どこか腑に落ちないところはありました。どうせなら「かわいい」と伝えてほしかった、と感じたのです。この瞬間、以前の祖母の言葉をふいに思い出しました。もしかして、あの時の祖母は私と同じ気持ちだったのではないかと。

「やばい」という言葉を辞書で引くと、よくないことが見つかったり、つまったりする恐れがある、危ない、という説明が出てきます。本来の意味がこのようなものだったとしても、そのままを貫かなければならないとは思いません。おかしな社会になったと嘆く人もいますが、世の中はだんだんと変わってきていますし、新しい言葉だっただくさん生み出されています。祖母も、本来の意味とは違うから使ってほしくなかった、とは意図していません。

しかし、やはりどんな時でも何も考えず発していいとは到底思えません。相手のことを傷つけるまでには至らないとしても、簡単に一言で片づけてしまうのは少し寂しいです。

祖母の夕食のような、愛情や思いやりのこもったものに対してならなおさらです。

嬉しいことにはうれしいと、可愛いものにはかわいいと、美味しいご飯にはおいしいと純粹に言えるような社会であってほしいのです。豊かな表現ではなくても、ことば溢れる世の中であってほしいのです。

私自身も、便利な一言で終わらせてしまうのではなく、自分の感情を素直に的確に表せるような人になりたいです。



都立桜修館中等教育学校 三年

堤川 琉凪

防災への意識

「黙祷。」

私は毎年三月十一日になると目を瞑って考える。大きな揺れ、水の恐ろしさ。その日は、からっと晴れた散歩日和。私は友達と保育園で遊んでいた。次は何をして遊ぶのかと悩んでいたのを乏しい記憶ながらも覚えている。そんなとき突然、無数の警告と園内放送が騒ぎ出した。

「地震です。地震です。」

私の胸はドキドキしていた。状況もよく分からず、暗闇の中を走っているような、そんな不安な気持ちだった。とりあえず先生の指示通り、防災頭巾を被り、近くの公園に避難した。隣の子と手を繋ぎ、離さないようぎゅっと強く握った。地面は揺れ、人は騒ぎ、ある子は泣きだし、私は困惑した。誰も触っていないのに激しく揺れているブランコは私にとって不思議で仕方がなかった。たくさんの音と変化を目の当たりにし、怖くなって私は繋いだ手を強く握った。その手を放してしまえばみんな置いてかれてしまう気がした。

揺れは収まり、停電で電車は止まったが母は歩いてお迎えをしてくれた。しかし、祖母と連絡が取れなかった。私の母の実家は宮城県の亘理町という沿岸部にある小さな町。当時、看護師の仕事をしていた祖母は日頃から忙しかったものの、地震があった時には必ず電話が繋がっていたという。

東京に住んでいたうえ、まだ幼かった私は「津波」の存在を知らなかった。今となって被災者の方々の話を聞くと、それは地震の揺れが止み、皆が安心し

きっていたときだったという。黒い波が遠方から現れ、徐々にこちらに近づいてくる。海沿いの家は流され、車は浮いている。そんな様子になることは誰もが想定していなかった。

地震発生から一週間後。連絡の途絶えていた祖母は、祖父と他の協力者によって見つかった。祖母の他に亡くなった人、音信不通のまま行方が分からない人は二万二千二百十五人にも及ぶ。

自然災害がいつ、どこで、どのように起きるか誰一人として分かる人はいない。私たちにできることは日頃から備えること。震災から五年後、私は家族の都合で宮城県にある祖父の家に住むことになった。宮城県の小学校に通い、当たり前のように毎月避難訓練が行われた。それに加え、地域の避難訓練も年に二回以上行われた。被災地での生活を経て、上京してきた私は疑問に思うことがあった。それは、東京の方々の防災意識だ。私の現在通う学校でも毎月、避難訓練がある。地震や火事など災害の想定は様々だ。しかし、笑っている人、私語を発している人を多く見かける。正直、私も周囲に流され不適切な行為をしてしまっている部分があると思う。だが、実際に災害が起きた時、笑っていられるだろうか。私は小学校の頃の避難訓練を思い出す。当時の訓練中、笑ってヘラヘラしている生徒はいなかった。静まった空気の中、そろった足音が辺りに響く音だけが鮮明に聞こえた。同じ訓練でもこのように差が生まれるのは、知っているか知らないかの差だと思う。あの日の出来事、人の苦しみ、別世界の沿岸部。だからこそ私は、今一度全員に自分の防災意識を見直してほしい。避難訓練の際、どれだけの人が災害によって命を奪われ、大切な人を失い、心に傷を負ったか考えてほしい。

震災から十二年後、祖母の十三回忌を迎えた。亘理町の沿岸地域に足を運ぶと新しい家が建ち、町並みは大きく変化している。人は毎朝目覚め、人と関わり、笑い合っている。一方、心のどこかにはあの時の記憶が残っている。津波の危険を叫んでくれた人たちは無事だろうか。走って逃げた人はみんな助かっているだろうか。私は、祖母が亡くなった海に話しかける。今の当たり前が当たり前ではないことを胸に刻みながら生きていきたい。



都立桜修館中等教育学校 三年

小林杏珠

会話の本質

あなたが中学生だととして、初対面の同級生とはどのように会話をしますか。

私はこの問いの答えがいつまでもつかめずにいました。私は内気で、そもそも自分から周りに話しかけるのが苦手です。教室では文字通り本の虫と化しています。そんな私にも話しかけてくれる人はいて、私も人と話すこと自体は好きなので、話しかけられたときはとても嬉しいです。しかしそれが初対面の会話の場合、深刻な問題が浮上します。ここで一度、四月の私をご覧頂きましょう。「杏珠ちゃんって推しはいるの。」「いないよ。」「好きなアニメとかあるの。」「アニメ見ないんだ。」「じゃあ漫画はどう。」「漫画も。」「好きな配信者とか。」「配信者分らないな。」

まごうことなき会話クラッシュヤーです。中学生になって初対面の人と会話する機会が増えてから、自分がいかに会話下手かを身に染みて感じるようになりました。共通項が見つからないんです。私はSNSやサブカルチャーにほとんど興味を持たないまま育ちました。自分から話を振ろうにも、私が好きなのは物理学や万葉集で、初対面の人との会話にはそぐいません。このようなわけで、私は初対面というものが苦手です。

実際は全ての人がアニメや漫画に詳しいわけでもなく、他に好きなものがある場合も多いのに、最初の頃の会話で「推し」関連の話題が多いのはなぜでしょう。私は友人たちの会話をつぶさに観察しました。どうやら「推し」を共有することが人と人の間に一瞬で親近感をもたらすようです。「推し」にあげら

れる人々の主な職種は配信者、歌手、アニメや漫画の登場人物等様々です。彼らに共通してあげられるのが、人々に何らかの情報を与える側であることです。ところで、情報を与えるものといえば読書が思い浮かびます。では、人々を読書に没頭させるものは何でしょう。それはその本の中に浸れることではないでしょうか。読書をしているとき、そこに「私」は必要ありません。自分がどれだけ落ち込んでいても、どれだけ気が滅入っていても、文章は何ら変わらずに進んでいきます。自分自身について思いおこす必要が全くないまま、大量に新しい情報が与えられていく、つまり、読書は手早い現実の忘却方法なのです。そう考えると、最近急速に浸透したように感じる「推し」と言う概念も、別段新しいものではないのかもしれませんが。自分の属性や状態を必要としない情報源であり、現実の忘却の役目を担う点では読書と何ら変わりありません。

今の若者は冷めていて無気力だという話をよく聞きます。実際、「無気力」疲れた」「だるい」というような言葉は、教室で毎日飛び交っていますし、私自身も気力があるかと聞かれれば肯かないでしょう。こうした抑鬱感を感じたときに支えとなるのが「推し」なのでしょう。それを共有することは、お互いの気力を大きく左右するものを共有することに等しいのです。要するに、彼らは「推し」について話しているとき、同時に彼らが属性や日常を忘却している状態、つまり学校にいるときとは真逆ともいえる状態について話しているのです。それによって無意識に相手のことを深く知ることができたと感じるのではないのでしょうか。

とすれば、知り合ったばかりの会話で大切なことの本質は、「推し」がいるかどうかではなく、お互いに深く知ろうとすることです。今までの私は、初対面の会話を当たり障りのないものにしようと意識しすぎて、自分を相手に伝えなすぎました。また、相手についても十分に知ろうとしていませんでした。これからは新しく出会った人を深く知ろうとする姿勢、また、自分についてもっと知ってもらおうとする姿勢を大事にして、より会話を楽しめるようにしていきたいと思います。



立川市立立川第四中学校 三年

近藤 寧々

祖父から教わった農業

「そろそろじゃが芋が収穫だからおいで。」

この言葉は私の祖父から幾度となく聞いた言葉だ。これを聞くと幼かった私はいつでも笑顔が溢れて勢いよく返事をしていった。

農業が大好きだった祖父というのは、私の母の父の事だ。一言で表すと「一生懸命」が似合う人だった。話を聞くと若い頃から仕事熱心でありながら孫には甘かったそうだ。祖父の家は私の家から一時間の距離だから、一カ月に二回は必ず行っていた。毎回祖父は家の裏か近くの畑に居て、茶色く柔らかい笑顔で迎えてくれた。今思えば私と祖父の関係は「普通」ではなかったのかもしれない。大体の祖父母と孫は室内で遊んだり、お菓子を食べるのだから、私達の場合、それに「畑仕事」が加わっていたのだ。帽子を被り柵を越えてフカフカの土を踏む。都心では中々できないことを八王子の田舎でやっていたのだ。

祖父は、私達がもらった野菜だけでなく自ら車を運転して届けに来てくれることも多々あった。往復二時間で私の家の滞在はわずか三分。まるで宅配業者のようだった。母が折角「お茶でも飲んでいく？」と誘ってもいつもの笑みで大丈夫と断る。祖父らしいと言えば祖父らしい。私は幼ながらに祖父みたいな人になりたいと常々思っていた。

そんな祖父らしさが私にも芽生えたのは、小学二年生の夏。通っていた幸小には小さな学級農園があった。一人一人植えたい野菜を選んで育てる活動をした時、周りは定番のトマトやきゅうりを選んだが、私はまだ家で育てた事の無

かったインゲンを選んでいった。するとクラスでインゲンに手を挙げたのは私一人。隣のクラスの友達に聞くと、そのクラスはインゲンに手を挙げた人はいなかったと言う。結局、学年五十人で私一人しかインゲンを育てず、インゲン畑は私と先生方だけで使用した。良く言えば流されない子供だし、悪く言えば子供らしくなかったのだろう、後々思い返せば、少し祖父に似ていたのかもしれない。インゲンも上手く育てられたし。

祖父が亡くなったのはそれから約一年後だった。元々病気をしていたし、健診の延長入院で亡くなったようなものだ。私にとって一番記憶があるのは亡くなる十時間位前。母に連れられて放課後に病院に行った。それが最後だった。はまだに信じられなくて、一番の後悔は最後に手を握ってあげられなかった事。父方の祖父が亡くなった時は四歳で、ほとんど覚えていないから新鮮だったのだろう。

祖父は町内の活動を多くしていたから、知り合いがたくさんお葬式に来ていた。私は、祖父への最後のプレゼントとしてメッセージを内側に書いた折り鶴を折った。そこに書いたのは、「おじいちゃんのキュウリ、美味しかったよ!」だった。

祖父が亡くなってから五年が経ったが、私は今も祖父に憧れている。家で野菜を育てたり、農業について調べたりしている。そのどれもをする時に必ず脳に浮かぶのは、祖父の笑顔だ。一生懸命で丁寧に優しくしてくれた祖父を思い出すと励みになる。

近年、若者を中心に「農業離れ」が進んでいる。私は農業が好きだけれど、そんな人が多くはない。だからこそ私は、祖父のような農業に携わる人達を全力で支えたいし、一生懸命、農業を学んで手伝える存在になりたい。そんな思いを持つ人が一人でも増えて欲しいと思う。祖父が繋いでくれたバトンを次の誰かへと繋げていきたい。

私が今できる事は、この主張作文を書いてより多くの人に祖父が残したこと伝える事くらいだけれど、もっと大人になったら周りに同じような仲間をたくさん創って、いざれ日本が農業で盛んになって欲しいなと思う。

私はこの作文を通して、農業に触れる楽しさ、そしてそこに携わる人の想いの重要さをより多くの人が知って欲しいと願う。



葛飾区立本田中学校 一年

榎山 瑠斗

僕の将来の夢

皆さんの夢は何ですか。僕の将来の夢は、司書になることです。皆さんは、司書の仕事を知っていますか？図書館や学習センターで働いている先生の仕事です。僕は本を読むのが大好きで、よく図書室に行きます。本が好きなので、小学生の頃は図書委員会に入り委員長をやっていました。小学校では、毎週水曜日に本を直してくれる先生が二人いらっしゃいました。その先生方が本を直している姿を見て、「家にある破れた本を直してみたい！」と思いました。毎週水曜日に図書室に行き、直すところを見ていたら、その二人の先生が「これはテープのペタペタを取るために付けるんだよ。」と優しく教えてくれました。それが、とても嬉しかったです。「じゃあ、司書になったら自分で直せるんだ。」と思ったのが最初のきっかけです。

僕は、図書館という場所がとても落ち着きます。学校で嫌なことがあった時や、むしゃくしゃしている時も、図書館に行けば、気持ちが落ち着きます。公園で遊ぶことも好きですが、僕は図書館で本というのも大好きです。司書の先生におすすめの本を聞き、本を読んでいると、だんだん頭の中で本の中の色々な世界に行けます。図書館で出会った人に普段読まない「もののけや」という本をおすすめしてもらい読んだら面白くてハマったこともありました。大好きな本を好きだけ読める場所にいられるなんて、すごく幸せだと思います。

昨年の夏休みに立石図書館で「一日司書体験」で司書の仕事を体験後、「子供司書クラブ」に入会し、中学生になった今、「YAクラブ」の一員として月

一回活動をしています。本の分類を学び、カウンターでの貸出、返却を行い、本の紹介の帯や、ポップを作成し、レファレンスをやっています。レファレンスとは、本を探す手助けや本を調べのお手伝いをする事です。全部僕にとつて楽しい事ばかりです。一番ドキドキしたのは、司書の人しか入れない倉庫に入り、歴史がある本を見せられたり、ボタン一つで本棚が自動で動かせる体験をさせてもらったことです。一つ一つの事に僕はびっくりしっぱなしでした。もし、僕が将来司書になったら毎日、驚きの連続ですごく楽しいと思います。毎日たくさん本を読み、読んだ本を覚え、知識を増やし、本に興味がある人には、もっと好きになってくれる本を覚えてあげたいです。本に興味がない人には、少しでも興味を持てる本をアドバイスできる司書になりたいです。図書館に来てくれた赤ちゃんに絵本を読んであげたいので、弟や妹で、練習しています。弟や妹は「もつとゆつくり」や「わからない」と注文が厳しいですが、勉強になります。「ありがとう。もう一冊読んで。」と言われた時は、とても嬉しいです。優しく笑顔で接することも大事なので、これは、頑張らなくてはいけません。

図書館は公共施設のため、全てのの人に平等なサービスを行わねばなりません。葛飾区内にある図書館を回っている交換便と言う連絡車で、点字の本や障がいの人を知るための本が回っているそうです。僕は、これから自分の近くの人だけに目を向けるのではなく、もう少し広く周りを見るようにして、色々な人がいることも知らうと思いました。一人一人、必要としているサービスが違います。一人一人を観察し適切なサービスが出来る司書になりたいです。将来、司書になり「この図書館は楽しい。色々な本を覚えてくれるよね。読み聞かせが上手。だから行きたいね。」と皆が言ってくれたらいいです。司書の仕事をしている未来の姿を想像するとワクワクして心が弾みます。司書になるためには、資格を取る試験があり、その道のりは厳しいですが、絶対に頑張ります。だって僕は本を通じて多くの人に喜んでもらい、笑顔になるお手伝いがしたいからです。



立川市立立川第一中学校 二年

三島穂紀

SNSと気持ちのコントロール

皆さんはSNSを使っていますか。スマートフォン、いわゆるスマホで使えるLINEなどの人との繋がりを作るインターネット上のサービスであるSNSは、気軽にコミュニケーションがとれる便利で楽しいツールです。私はこれまでこれからも、毎日を豊かにするためにSNSを利用していかうと考えています。

今はSNSを使っていない人も使わないと決めている人もいるでしょうが、きつと多くの人がいずれはスマホを持ち、SNSを利用するようになる予想しています。しかしSNSは便利な反面、学校や家庭で再三指導される通り様々なトラブルを引き起こす側面もあります。

私は昨年の春中学生になり、今思えば気持ちが悪かったのだと分かるのですが、LINEで友達にとっても嫌な思いをさせてしまいました。今でも心のどこかでチクチクと痛み、後悔しています。中学生になる前から心がから大事に想っていた友達です。SNSの怖さや危険も頭の中で十分に理解していたつもりです。ところが私は、SNSのトラブル例に挙がるような「返信が遅い」「私のことは大事にされていない」という半ば言いがかりのような言葉で自分の不安な気持ちをLINEで送り、結果的に友達を追い込んでしまったのです。もちろん友達のことを大好きな気持ちに変わりはなく、追い込むつもりも全くなかったのですが、友達に言われて自分の送ったLINEを読み返すと、確かに後悔してもしきれない反省の思いが込み上げてきました。謝ったらすぐに許し

てくれた友達には感謝していますが、多分私はこの後悔に伴う胸の痛みを一生持ち続けることだろうと思います。

大事な友達を傷つけてしまったことは、私の中でSNSに対する注意点の認識にプラスして恐怖心を植え付けました。LINEは基本的に文字や絵文字、スタンプでのやりとりなので、相手の表情が分からず行き違いが起きやすいと言われるのも十分理解しています。また、やりとりのスピードが人によって違うので、余計な憶測を招いたり誤解が生じやすく、人間関係を育む手段であるはずが、その関係を壊してしまうことも起こり得るのではないのでしょうか。中学生の私は頭で理解していても、自分の気持ちをコントロール出来ませんでした。大きな失敗は、気持ちを優先してしまい、小さなリスクを想像できなかったことが原因で起こると学びました。どんなに便利でも、SNSで知る面はその人のほんの一部分です。一部分だけを見て、好き嫌いを決めたり浮かれたり落ち込んだりしないよう、SNSだけを判断基準にすべきではありません。友情を育む手段をSNS一つだけではなく、他の手段を探す手間を惜しまず、自分の頭と心と言葉をフルに活用しようと思います。

しかし、このようにSNSの怖さを思い知る経験をしましたが、これからの時代はスマホやSNSが無くなることは到底思えません。逆にますます進化していくと予想しています。それならば避けるよりもSNSを上手に正しく使うべきだと思に至りました。苦い経験を積んだことにより、大人になっていく過程で、SNSを適切に使うべき必要を強く感じたからです。これは泳ぎを覚えた時と似ています。将来水に溺れないようにと幼い私に母が水泳を習わせてくれたのですが、最初は自分でもいつか泳げるようになると思えぬ有様が、数々の練習や失敗を肌で感じながら、水の危険は回避出来るようになったと思っています。このように十分な経験を積んでいけば、大きな失敗を起こさない道を歩めるはずです。私はSNSにおいても同じ道を辿ることが必要だと感じます。何が危なくてどうすればトラブルを避けられるのか私自身の感覚でとらえ、SNSを正しく使いたいと思います。そしてプラスの作用を得ることを常に目標にして、SNSを活用していくと決めています。



十文字中学校 一年

毛利日鞠

「青春取扱説明書、規則改正を添えて」

中学に入学し、真新しい制服に袖を通し、様々な地域から通学している友人と共に学びのある日々です。毎日がとても新鮮で、好奇心が刺激された私はクラスの代表委員に立候補しました。代表委員とは、クラスごとに二名ずつ、校内に関する事柄について話し合い、クラスに伝達する役目を担っています。

役目の一つに生徒心得の見直しがあり、四月から取り組んでいます。一般的に校則と呼ばれるものと同じですが、私の学校では、生徒の意見を多く反映するという考えのもと、こう呼ばれています。

多くの中学生は、全力で今を楽しんで学び、少し背伸びをして成長したいのです。もし、学年を越えた自発的活動で、生徒心得の見直しを協働して実現できたら……。今しか取り組めない事の一つだと思い、私はワクワクしています。

学校は学生に規則、規範を示すことで、集団生活の継続に必要な一定の同調を求めます。それらを守ることは道徳的に善いことであり美しさや清潔さを保つことができます。学校において、文化や伝統を守っていくことが、教育使命の一つだと思うので、私は規則が必要だと思っています。

その中で生徒心得見直しについて生徒主体で取り組むことは、自ら学び続ける姿勢と一つの価値観に捉われない柔軟性を育てる、私の通う女子校の教育方針から与えられている貴重な機会です。学校の歴史を創る一つになると思い、好奇心と同時に責任感を持つて取り組んでいます。

ではなぜ規則を変える必要があるのでしょうか？最近では、校内で制服にパ

ンツスタイルや、夏期のポロシャツ使用が導入されました。私たちを取り巻く環境や、社会的風潮を受けて選択肢の幅を広げた結果です。

しかし、生徒からの改正要望は、校内のスマホ利用の自由化や、不要とされている物の持ち込み許可などです。確かに楽しそうですが、生徒から上がる意見には自由度を高める要望が多く、生徒本位に偏り過ぎてはいないかと疑問を持ちました。規則は守る人の為のものではありますが、場所や時代に合った規則は、結果的に周りを巻きこんだ利益に繋がる事があります。例えば、大谷ルールです。

今やニュースで取り上げられない日はない、アメリカ、大リーグでの活躍は素晴らしく、私もすっかり大谷選手のファンです。

大谷選手の活躍には、身体能力の高さと野球に対するリスクベクトが前提ですが、先発投手と指名打者の二刀流がルールとして認められたことが大きいです。競技としての公平性が保たれ、選手ファーストでルールの幅を広げた事による大谷選手の活躍が、結果として大リーグ人気再燃にも繋がっています。

このことから、規則の改正には規則を与える側と守る側、両者にとつての利益を生み出す事が求められると思います。私たちが規則に求める自由は、学校側にどんな利益を生み出すでしょう。入学希望者が増える？地域から誇りに思われる学校になる？数値化できる利益を証明できるのか。もしかすると真逆の結果を招く可能性も十分にあります。

最初に触れたように、学生生活の中で規則は、大切なインフラストラクチャーの一つです。規則改正について学校全体を巻き込んで向き合い続けることで、自分たちが思い描く未来を現実近づけるのだと思います。

学生時代の規則は、青春との繋がりが深いです。そのため、青春の取り扱いは劇薬のように慎重に、大切さが求められます。なぜなら、とても私たちは繊細で儂い反面、やる事は大胆になりがちです。青春の取扱説明書はとも複雑で星の数ほどあります。私たち一人一人の個性が輝くような規則をもとに成長し、世界に恩返しできる大人になりたいです。



都立武蔵高等学校附属中学校 三年

吉川 鳴海

心を彩る年中行事

日本の年中行事についてお話ししたいと思う。みなさんは年中行事と聞いて何を思い浮かべるだろうか。クリスマス、ハロウィンといった行事だろうか、はたまたそれに付随するプレゼントやお菓子などだろうか。これから私の家のささやかな行事の様子をお話ししたいと思う。

私の家では、年末年始から始まり、節分、桃の節句、端午の節句、七夕、盆、月見などといった行事を家族総出で行う。特に印象的な行事は節分である。二月三日の夜、母と妹と一緒に作った恵方巻をその年の方角を向きながら食べる。そして父は、隠れてこっそりと母お手製の鬼の衣装へ着替える。野球のバットにアルミホイルを付けた金棒を持ち、細かく裂いてわらに見立てたすずらんテープを全身にまとい、鬼のお面をつけた姿は正に恐ろしい鬼そのものである。小さい頃の私や幼い妹はその迫力に怯え、泣きながら豆を投げつけていた。さらに、家の中では終わらないのが我が家の節分である。近所の仲の良い家を訪問しては同じように子供達を恐怖へと叩き落とす。一通り終わった後は、武装を解除し、ステテコ姿になった父が現れる。幼少期はなんて情けない姿でいるのだろうかと思っていた。しかし、現在では節分の肝である鬼を全身全霊でやり切った達成感から来るものであると気づき、豆まきを盛り上げてくれた父とそれを支えた母に感謝している。

このように様々な行事を私の家では力を入れて行っている。しかし、近年では行事を行わない家庭、更には行事の存在すら知らない家庭が増えているとい

う。理由としては「手間と時間がかかる。」「費用がかかる。」というものだ。確かに時間のない現代の人々には年中行事をする余裕はないかもしれない。しかしだからこそ私は寂しい現代人にもう一度行事の意義や価値を思い出ししてほしいと思った。そこで、私は家族で年中行事を行うことにはどのような良さがあるのかを次のように考えた。

まず、人の心を豊かにする効果がある。七夕の笹やクリスマスのツリーなど行事には色鮮やかな飾りを用意するものが多く存在する。そのような飾りは準備も楽しく、完成後も見る人の気持ちを明るくしてくれる。また、盆の精霊馬や正月のお節料理は我々にご先祖様に思いを巡らせたり、心を引き締めてくれたりする。

次に、正しい所作が身につく。例えば初詣の際、どのように手を清めるのか、参道のどこを歩くべきなのか、どのように参拝するのかなど細かく作法が絡んでくる。このような作法は外では教えてもらえず、家庭内で学ぶしかない。そのため行事などを通じて親から子へと伝えていくことが必要なのだ。

最後に、家族間のコミュニケーションを増やしてくれる効果がある。家族で料理を作る、飾りを用意する、など行事を行うことで家庭内の交流が増える。また、行事に即した話題で会話が弾むといった良さもある。さらに、先程述べた私の経験からもわかる通り、家庭内だけでなく、近所の人々など外部の家族とも交流することができる。

以上が私の考えた年中行事を行うことの良さだ。つまり行事には、その活動を通して人の心や振る舞いに影響を与え、人と人との繋がりを再認識させてくれるという人間が生活を送る中で非常に大事な役割を持っていると言える。ゆえに行事は意識している、知っているだけではなく、伝統的な形式を伴って初めて、人々の心身に意味のあるものとなるのではないだろうか。

このような理由から私は行事を行うことをおすすめする。日本の行事は四季折々、多種多様なものがある。そうした行事がみなさんの心と日々を明るく彩ってくれることを信じている。



あきる野市立増戸中学校 二年

渡邊 一太

「いじめ」と向き合う 「人」と向き合う

いじめなんて僕は気にしていませんでした。ある日の授業でいじめについて学ぶ機会がありました。その授業をうけていて、もしかしてあの時のでき事は「いじめ」だったのかもしれないと感じたことがきっかけでいじめについて考え、受け止めることができるようになりました。

僕は、毎日友達と追いかけていました。普段の追いかけては、いつの間にか、集中的に自分だけが追いかけられるようになり、次第に怖いと感じるようになっていきましたが、当時は深く考えずにいました。ある日、僕が「やめたい」と言いましたが、やめさせてくれず、背中を蹴られ、転ばされました。近くにいた先生が「やめなさい」と気づいてかけ寄ってくれたことで、その場は解決しました。しかし、その後も、時々、先生の見えないところでちよっかいを出してきたり、自分が嫌だと思っているあだ名で呼んできたりしました。このことは、当時は、いじめだとは思っていませんでした。そして、いじめられているとも、思われたくありませんでした。周りの人にも言いたくありませんでした。相手にとって、自分が何か悪いことをしたか、嫌だと思わせることを言ったか、などを考えましたが、思いつかず、悩むこともありました。

しかし、授業でいじめについて学んだ日から、このままにしているは自分にとっても相手にとっても良くないと思うようになりました。僕は母に相談しました。母は親身になって聞いてくれました。すぐ解決できることではないけれど、気持ちがとても軽くなりました。他の誰かに知られたくなかったので、先

生にも話していませんでしたが、母と話し合い、先生に事実を打ち明けました。それ以来は、嫌なでき事は無くなりました。

自分が伝える勇気を持ち、一歩、踏み出せたことで、相手にも、些細な言動が人にどんな思いをさせていたかを理解してもらえたと思います。そう願います。

表面的には些細なことでも、嫌なことをされた人、言われた人が、悲しい気持ちや、屈辱的な気持ちになったりすると、それは「いじめ」になります。僕は「いじめは気づかないうちに始まっている」ことを経験しました。いじめをした人、された人、どちらも気づいていないのです。いつの間にか、エスカレーターし、気づいた時には、取り返しのつかないことになっている現実をニュースで見かけます。どうしてまわりは気づいてあげられなかったのか、いじめられている人は何かサインを出していなかったのかなど、あとになってから世の中の大人達は原因を探します。しかし、誰かに知られるのが怖いと思い、いじめを打ち明けることができず、隠そうとする人もいます。僕には話を聞いてくれる両親と先生が側にいました。自分の話にしっかり耳を傾け、親身になってくれる人がまわりにいてくれたおかげで、打ち明ける勇気をもてたと思います。エスカレーターしていくのを食い止めるには、打ち明けやすい環境、信頼できる関係、心に耳を傾けることが大事だと思いました。

「いじめ」をなくしたい。誰もが思うことだと思います。でも、人の心はそれぞれ違う。それぞれ、感じ方、受け止め方が違います。お互いが、まったく同じ気持ちになれるのも難しいことです。だからこそ、少しでもお互いの気持ちを分かろうと、近づけるよう、寄り添う努力が必要だと思っています。

自分と同じ思いをする人を減らしていきたいです。

杉並区立井荻中学校 一年

赤塚真柚人

あいさつは大切？

「おはようございます。」

僕の登下校中の気分はいつも明るい。なぜならシルバーさんがいるからだ。いつも笑顔であいさつをしてくれる。

「あいさつはすごく大切」と小学校のとき校長先生が言っていた。特に僕は深く考えずとりあえずやっておけばいいかと思っていた。

やがて本当にあいさつは大切なのかと疑問に思うようになった。

しかし中学校に上がってからもいろいろな場面で同じようなことを言われるようになった。

でも今では僕が、あいさつはすごく大切だよとみんなに言いたいくらいだ。それはある出来事がきっかけだった。

最初にシルバーさんにあつたのは小学生の時。僕は合唱団に入っていて、朝早くから登校していた。

そんな早くからでもシルバーさんは、僕よりも早く来て雨の日も、風の日もあいさつを返してくれた。

しかし中学校に入りその通学路を通ることが少なくなり、このあいさつの関係も途切れるのかなと思っていた。けれどあいさつの関係は、あまり変わらなかった。僕が遊びに行くときあいさつしてくれたのだ。僕が

「今は下校中じゃないですよ。」

という。

「そんなのは関係ないよ、僕が好きでやっているのだから」

と言ってくれた。

僕もそんな人になりたいと思い、シルバーさんの真似をし始めた。そのおかげで先生や地域の人にほめられたりすることが多くなった。そして二つの事に気が付いた。

その事とは、仲が良い人が増えることだ。人はまず初めにあいさつから人間関係をスタートさせる。社会などでは、あいさつから入りお互いの考えや思いを伝え、理解し合おうとしているのだ。

もう一つは自分自身も相手も清々しい気持ちになることだ。だからあいさつが返ってこないと心に違和感が残る。

僕は今までただあいさつをしてきただけだったが、このようなことを意識してあいさつをするようになった。

例えば僕は時々散歩に出かける。家の周りは、犬を飼っている人が多いので朝方や夕方などはよく散歩している。そこで僕はいつも自分からあいさつをする。時には会話をするときもある。すると相手は、返してくれない人もいるが、大抵の人は笑顔で挨拶を返してくれる。

そしてあいさつをかわすことで地域の人と自然に良い関係を築くことができる。

僕はシルバーさんとの出会いをきっかけにあいさつの大切さに気付くことができた。これからもあいさつや地域も人達との関わりを大切に、新たな発見や出会いをもとめてあいさつを続けていきたい。

晃華学園中学校 三年

池田 華

8月9日

8月9日と聞いてあなたは何を思い出しますか？では1945年8月9日午前11時02分は何があった時刻か分かりますか？

長崎に原子爆弾が投下された日です。このたった一発の原爆で多くの方が亡くなり、未だ病気で苦しんでおられる方、被爆者と認めてもらえず今も裁判をしている方がいらっしやいます。原爆の苦しみは昔のことではなく今も続いているのです。

私は長崎で生まれ、小学校3年生まで長崎で過ごしました。8月9日は夏休みですが、長崎では登校日です。そして平和集会が行われます。全校生徒が集まり、被爆者の方の話を聞いたり、平和について話し合います。そして11時02分のサイレンと共に黙祷をささげます。小学校3年生の秋、私は東京へ引越しました。夏休み、長崎の8月9日はもちろん、広島の8月6日でさえも登校日が無いことに驚きました。このことは私の心の中に悲しみと怒りと疑問を生み出しました。

街全体、長崎全体が平和の祈りに包まれるあの独特な一日は被爆地だけのものなのか。

それから私は原爆の事を忘れたくないという思いから、長崎へ毎年8月9日に帰省し長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列します。被爆者代表の方は式典でこうおっしゃいました。「77年間、怒り苦しみ、悲しみも乗り越えて、生きてまいりました。核兵器のない世界実現への願いを引き継いでいきます。」あの夏の日何が起こしたのか。私たちは語り継いでいかなければいけません。も

う二度と起こさないために。忘れてしまわないように。

日本は、核兵器禁止条約に署名、批准していません。核の傘にいるのではなく、自ら世界で唯一の被爆国として非核の傘に入るべきです。私は中学1年生の時から高校生一万人署名活動という平和活動に参加しています。長崎から始まったこの活動は今では全国へと広がり、昨年25周年を迎えました。この活動は核兵器廃絶と平和な世界の実現のため、署名を中心に活動しています。

この活動の中で私の心を掴んで離さない被爆者の方の言葉があります。「あなた方に私の体験した原爆は理解できない。」

確かにそうだな、と思いました。私たちは被爆者の方から聞いた話や事実を伝えていますが理解することはできない。でも、だからこそ私は刻一刻と減ってゆく被爆者の方々に耳を傾け、伝えていかなければならないという使命感に駆られるのです。またアメリカの方から聞いた話で「私は原爆資料館に絶対に行きたくない。日本にも非があるのにアメリカを悪者にして被害者ぶっているからだ。」と聞きました。

私には日本とアメリカどちらが正しいかは分かりません。それよりも罪のない大勢の人々が一発の原爆によって戦争の犠牲になったこと。それについて考えていきたいと思っています。私は高校1年から約1年間、アメリカへ留学します。

現地の高校生が原爆についてどこまで知っていて、どう考えているのかを知りたいし、話し合いたいです。日本だけでなく世界に向けてあの夏の日のこと、原爆の事を伝え続けていきたいという思いからです。

また、高校生一万人署名活動のアメリカ支部を作ること私の目標の一つです。なぜそこまでしたいのか、と問われるとこう答えます。将来核兵器廃絶に貢献できる仕事をしたいため。

長崎で生まれ育ち、戦争、原爆の記憶に人一倍触れてきた私にとって、核兵器廃絶のために尽くすことは使命だと感じています。

大人になるまで待つ必要なんてない。今、この時だからこそ出来ることがある。

私はこれからも8月9日を想い、祈り、行動し続けます。それは微力だけど無力じゃないから。

立川市立立川第五中学校 二年

石川 高人

障害ではなく特性です

発達障害という言葉聞いて、ポジティブなイメージを持つ人はどれくらいいるでしょうか？そもそも発達障害とはどのような事を言うのでしょうか？「障害とは」

障害者基本法で調べると、障害者を「身体障害、知的障害、精神障害（発達障害を含む）その他の心身の機能の障害がある者であつて、障害及び社会的障壁により継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける状態にあるものをいう。」と書かれています。この内容を読んで、発達障害という名前がどうしてもピンとこなくて、名前を変えたほうがいいのではないのでしょうか。僕は人と違う所が沢山あります。みんなが当たり前前に行ける事でも僕にとつては難しいと感じる事があります。例えば、整理整頓が苦手だったり、物をなくしたり忘れたりしてしまいます。自分ではやろうと思ってるのにうっかりミスをしてしまう事がよくあります。中学生になって忘れ物をする度に怒られたり、しっかりとしないといけないと注意されたり減点されたりして悩みが増えました。そして、その事を母に相談した時に、僕がミスをしてしまう理由は、僕には注意ができない特性があると知りました。そしてそれは発達障害と呼ぶ事を知りました。最初に発達障害と聞いた時は、僕は何か病気があると思ひショックでした。決してポジティブなイメージはわかんなかったです。きつと友達も発達障害という言葉聞いてポジティブなイメージを持つ人は少ないと思ひます。

母は僕をよく天才だと言ひます。みんなにはない才能を持って産まれてきたと言ひます。人と違った才能を持って産まれてきた人は人一倍苦労もある事を

教えてくれました。その通りで、たまに自分のミスに落ち込んだりへこむ事があります。でもすぐに気持ちを切り替えて前を向くようにします。そうしないと、よけいに悲しくなるからです。切り替えが早いのも僕の特性の一つで救われています。実際に僕は毎日楽しく学校とサッカーに通っています。学校では、たくさん怒られたり、成績も悪いけれど、それでも障害の説明に書かれていたような生活に制限を受ける状態ではありません。誰でも得意、不得意があるのと同じで、障害と言うより個性、特性と言つた方がしっくりきます。

人にはない特性を持って産まれたからにはその特性を生かした者勝ちだなと思ひます。できない所にくよくよするより、得意な事を生かして笑っていられる人生の方が幸せだと思ひます。これは発達障害のある人もない人も同じだと思ひます。誰でも不得意、得意があるのだから、みんなが不得意な所にこだわらず、得意な所に注目できる世の中になったら、もつと笑顔の多い楽しい世の中になると思ひます。発達障害に関係なく、お互いの不得意な所はお互いが理解し支え合ひ、得意な所は自信を持って力を発揮できる世の中にしたいです。そのための第一歩に、発達障害と呼ばず、特性と呼ぶ事から始めたいです。

都立桜修館中等教育学校 三年

石田 ひなた

うつ病について

健康第一とよく耳にしますが、健康について深く考えたことはありませんか。健康とは、病気にかかっていない正常な身体の状態のことだと認識している人が多いと思います。しかし、健康であるというのは身体だけのことではありません。

健康という言葉は、中国の古典「易経」にある「健体康心」に由来します。これは体が健やかで心がやすらかな状態を指します。だから、身体も心も元気な状態でないとは健康ということではできません。

心の健康について、「うつ病」という病気があります。うつ病とは、脳のエネルギーが不足することにより意欲の低下など様々な症状を伴う病気です。発症の理由も、症状も人それぞれで、精神的な症状だけでなく、身体的な症状を伴うことも珍しくありません。

厚生労働省のホームページによると、うつ病の患者数は平成二十年には平成八年の約二・四倍である一〇四一万人に増加しています。そして、医療機関を受診できていない患者数も含めるとより多くの人がうつ病を患っていると考えられます。

実際に私の祖父と母がうつ病を患った経験があります。祖父も母もまじめで責任感の強い性格です。母がうつ病を患ったとき、はじめは少し落ち込んでいただけかと思いました。しかし、次第に様子がおかしいことに気がつきはじめました。ある日、母の手の甲が真っ赤になっていたのです。どうしたのか聞くと些細なことでも自分を責めて、自分でつねつねと答えました。私は、父にこの

自傷行為の件を伝えて、母はその後精神科を受診しました。そして、うつ病だと診断されました。

母の具合が悪い間、家事などの生活面では仙台に住んでいる祖母に来てもらい、サポートしてもらいました。しかし、母がいつも通りに働くことができないということは家族にとって不安でした。

それから、時間の経過と薬の効果により母の状態は落ち着いて回復に向かいました。

この体験を通して私が感じたことは二つあります。

一つ目は、うつ病の回復には周りの人のサポートが重要だということです。うつ病は短期間で治癒するものではないため、人にサポートしてもらいながら療養していく必要があります。また、自分がうつ病だという自覚があり、自発的に病院を受診することができるケースは多くないでしょう。そのため、親しい人が異変に気付いて一緒に受診してあげることが大切です。

二つ目は、まだうつ病に対する無意識の偏見が残っているのではないかと思います。それは私自身にもいえることです。実際に私は、周りの人に母がうつ病であると伝えることに抵抗がありました。なぜなら、私は以前うつ病は性格の暗い人や、精神的に弱い人がなる病気であるという思い込みを持っていたからです。しかし、うつ病について本などで調べていくにつれてうつ病は心の風邪だという認識が変わっていきました。風邪は誰でもかかる可能性があり、本人の意思で治すことはできません。

うつ病という病気と向き合っていくためには周りの人のうつ病への正しい理解が必要不可欠です。そして、うつ病への正しい知識、理解を広めていくことはうつ病に対する偏見や差別をなくしていくことに繋がります。

忙しい現代だからこそ、改めて身体だけでなく「心」の健康を見直してみてください。

都立大泉高等学校附属中学校 一年

市川芽奈

私たちが変わっても変わらないもの

みなさんは、両親と過ごす時間は、常に楽しいですか。家で過ごしている時、居心地の悪さを感じてしまうことはありませんか。

私は最近、父と二人きりの時、会話に消極的になってしまいました。父が、私の気持ちを分かってくれないように感じてしまうからです。

私の母は夜帰りが遅いことが多く、その日の夜は父と過ごします。私は夕食の時間が少し憂うつです。父は私が話題を振っても小さな反応しか返してくれず、父も無理をして私と関わろうとしているように思えるからです。前までは自然に楽しく会話していたのに、父は何が変わってしまったのだろうと、悲しく思っていました。

ある大学の教授の調査によると、「父親は自分に対する理解度が高い」と感じる子供は父親との会話頻度が多く、小学生よりも中学生の方が、父親の理解度は低いと回答しているとありました。

この結果から私は、皆の父親も、私の父のように、段々口下手になっていくのだと思っています。しかし深く考えると、私達子供にも問題はありそうです。変わってしまったのは親の方ではなく、子供の方かもしれません。まずは、相手を考えるよりも、自分の変化に気付くことが大切なのではないでしょうか。

人は年を重ねるにつれ、精神においても成長します。三歳頃から他者という存在を認識するようになり、段々と仲間一人一人の違いや個性に気付いていくのです。それと同時に、相手に対する配慮や、自分の明確な感情なども芽生えてきます。したがって、両親に対して反抗してしまったり、嫌な存在に思っ

しまったりするのは、私達子供が成長する過程において必然的なことなのかもしれません。

確かに、私の友人達に話を聞くと、大半の人が親を苦手だと思っていると思います。関わってもストレスがたまる一方で、しかることしかしらない、と考える人が多いようです。私も、父と食事をする時は、口数がお互い減ってしまいます。しかし、それはいつもというわけではありません。休日家族でプールや買い物に行った時は、一緒にはしゃいだり遊んだりしています。きっとそれは、お互いが今の気持ちを共有したいと考えているからだと思います。楽しさをコミュニケーションを通して伝えることで、幸せが広がっていくのです。

みなさんが両親と関わることをためらってしまうのは、きっと自分の気持ちは伝わらないだろうと、知らずのうちに境界線を引いてしまっているからだだと思います。自分の気持ちを知ってもらおう、と少しでも思えば、言葉に気持ちが乗り、お互いに変化が訪れるかもしれません。私は実際に、父とコミュニケーションを意識的にとるようにしました。すると父の方も楽しそうにしている様子を感じられ、家という場所、家族という存在が、今までの自分はこのように大切なものだと思いが付いていなかったことを知りました。

今、私のように両親と向き合うことに悩みを抱えているみなさん。自分自身の心とまずは向き合ってみて、心は体と同じく成長していて、目には見えないけれど変化しているということを思い出してみてください。そして今までは少し違う家族への見方を自ら加えて接すれば、きっと家族同士の温かさを共有できるはずです。家族は、年を重ねても変わることのない大切な存在だと改めて実感し、毎日がより充実したものになってくれたら嬉しいのです。幸せを感じる根である家族と、みなさんとの関係が、常に深くあるよう、私は願っています。

立正大学付属立正中学校 一年

井福 幸多朗

地域活動から学ぶこと

新型コロナウイルスが5類に分類され、各地で自粛していたイベントが復活している。僕の住む地域でも、四年ぶりに「神田祭」が開催された。神田祭の規模は大きく、「江戸三大祭り」のひとつに数えられている。神田祭の始まりは定かではないが、江戸時代には、徳川家康が関ヶ原の戦いの前に「神田明神」で戦勝を祈願し、勝利した日が、祭礼日だったことから、縁起のいい神社とし、祭りを絶やすことなく執り行うよう命じたそう。そして今でも神田祭は伝統的な行事として続いている。

僕の町会の神輿は神社の形をしていて、金色に装飾されている。頂きにはホウオウがついている。祭りの二日間は各町会の豪華絢爛な神輿が町内を練り歩く。町会の神輿は子供神輿と大人神輿がある。子供神輿は担いでもすぐに休憩したり、お菓子もらえるなど子供たちが目を輝かせて喜ぶイベントだ。大人神輿は一区画が長く、休憩のときはお菓子の代わりにお酒とジュース、食べ物が出される。前回までは子供神輿に参加していたけれど、僕は中学生になったため、今年は大人神輿に参加することになる。しかし、数か月前まで小学生だった僕の気持ちは、まだ子供神輿だ。内心は「中学生は参加していかないかもしれない」「屈強な大人達の中に入っていかなければならないのか」と考え、不安は大きく、心細かった。「法被を着て後ろについていけばいいや」と、消極的な、気持ちが見えかくれしていた。しかし、学校帰りににぎやかな神輿が町を練り歩くのを見かけ、僕の気持ちは一変した。

神輿には友達のお父さんが大汗をかいて参加しており、僕に向かって笑顔で

手を振ってくれた。僕は祭りの熱気を肌で感じ、いても立ってもいられなくなり、家に急いで帰ると法被に着替えて、神輿をすぐに追いかけた。神輿は休憩を終え、担ぎ始めるところだった。大人達は、不安げな僕を気遣って「ここに入って担ぎなよ」と声を掛けてくれた。神輿は実際に目の前で見ると大きく、僕の力ではびくともしなかった。みんなが一丸となって神輿を持ち上げる。神輿の担ぎ棒は僕の肩と同じくらいの高さで、神輿が上下に揺れると担ぎ棒が肩を打ち付けて痛い。担ぐ時間が長く周りの大人についていくので必死だった。交代ができず長く担ぐときは、「もう休みたい」と思っただけれど、休憩すると、不思議と次もまた担ぎたい衝動にかられる。

そして何より僕の心に残ったのは最後の神輿もみだ。担ぎ手が一気に集まり神輿を上下に激しく揺らす。担ぎ手が増えるにつれて、僕はどんどん中に押し込まれた。最初は周りのおじさんがひよるがりの僕が押しつぶされないように守ってくれたが、盛り上がりが増すとおじさんも一緒にみくちゃんになっていった。僕らも負けまいと大きな声で「ソイヤッ！」と声を張り上げた。合図とともに神輿を止め、三本締めで終えた。わずかな時間だったが、大人と苦楽を共有したことから、僕は少し大人になった気がしていた。

祭りを通して、僕は地域の方々と交流をすることができた。僕の住む町会ではゴミ拾いや火の用心の夜回り、餅つき大会、運動会などの地域活動がある。僕は、餅つき大会や運動会には参加していたが、ゴミ拾いや夜回りには参加してこなかった。しかし、今回、地域の方々と一緒に大人神輿を担いだことで、町をつくる役割も果たしていきたいと思うようになった。

二〇二二年四月に成年年齢が十八才に引き下げられた。僕らは高校を卒業すると同時に社会的な責任が大きくなる。一方で未成年者の起こす事件や非常識な行動を伝えるニュースが後を絶たない。色々な人と関わり感謝する気持ちから自分自身の役割を考えるのだと僕は思う。

都立武蔵高等学校附属中学校 三年

小俣百合

真実の日本

現在、少子化が叫ばれており、政府は異次元の少子化対策を実行に移しつつある。この話題をニュースで見ない日はないが、私の日常生活では感じられていない。私に通っていた小学校では生徒の人数が増えて教室が足りず、校舎を増築した。スーパーでも通学のバスに乗っても、子供も人もたくさんいる。しかし、私はもう一つの日本の姿を知っている。

母の実家は東北の海沿いにある小さな集落で、今は二百人が暮らしている。母が子供の頃は千五百人ほどが住んでいたが、ここ三十年子供が生まれておらず、その地区の平均年齢は七十歳を超えているそうだ。これはいわゆる限界集落であり、あと十年で消滅することが確定している。半壊、放置された家が多く、人が住んでいる家は僅かだ。今から四十年前には、保育園や学校、肉屋や魚屋などのお店があり、地域の中で生活するのに特に困る事は無かったという。ところが、今では高校へ行くのにバスで二時間もかかるようになった。また、食料品を揃えるには四十分、病院へは一時間半も車を運転しなければならぬ。そのため、車がないと暮らすことができず、年を取ったとしても免許の返納もできなくなっているのだ。生活の基盤が弱く、非常に不便な状態なのである。

では、なぜこのようになったのだろうか。結論から言うと、その地域の若者が仕事を求めて大都市へ出て、村にはない便利さに気づいた事によって、故郷に帰らなかつたためである。そうすると、地区に生まれる子供の人数が減り、それに関するインフラが失くなっていく。お店では跡を継げる人がいなくなつて、親の世代限りで消えてしまう。次第に働くことが可能な年齢の人も皆無と

なる。このようにして、一つの地域が消滅してしまうのである。

私は母からこの話を聞いた際に、とても同じ日本の中で起こっている事だとは思えなかつた。もし自分の故郷が失くなってしまつたら私は耐えられないだろう。母にこのことを問うてみたが、諦めざる得ないのだと話していた。一度機能しなくなつたら元には戻らないということを感じた。一朝一夕の対策ではどうにもできないのである。母の故郷のような村は全国でも珍しくなく、むしろそれが普通で、東京やその他の大都市が異常であるのだ。私は異常な中で過ごしているからこそ、本当の意味での普通の日本というものに気づけていなかったのだと知った。

ここまで述べてきたように、日本は深刻な現状を背負っている。今、栄えている地域があつた村のようにならないとどうして言えるのだろうか。そのような確証はどこにもないのだ。子供のいない地域に未来は存在しない。私はもうこのことを知ってしまった。見て見ぬふりはできないのである。よつて、これから私は知ったことを伝えていこうと思う。自分だけではどうしようもない大きな課題であるが、知ってもらふこと、誰かに伝えることはできると考えたためだ。過去は変えようがないが、未来は変えられるかもしれない。私は信じている。

都立桜修館中等教育学校 三年

河田凜子

「偏見」という大きな壁

中学に入ってから、電車での通学にやっと慣れてきた二年生の夏だった。あの日の下校中私が乗っていた電車の隣の席に三十代くらいの女性が座った。以前から下校中に何度か見かけたことのある方で、ヘルプマークを付けた鞆をいつも持っていた。たまに電車内で見かけるときはとてもうるさく、控えめに言ってもマナーが良いとは言えなかった。だから、私は何となく怖いと思っていて、なるべく目を合わせないように、大きな音や声をした時だけちらっと盗み見るような、そんな態度をとっていた。もちろん悪いとは思っていたが、なかなかその癖を直すことができず、いつもちらっと見てしまった後に「ごめんなさい」と、心の中で謝っていた。

そんな私の考え方が百八十度変わったのは、中学二年生の春ごろだったかもしれない。母から職場の先輩の社会人の娘さんがダウン症だという話を聞いた。その日から、母からときどきその娘さんの話を聞くようになった。その話は何ともかわいくて、つい「ぶふっ」と笑ってしまうようなものばかりだったのだ。電車で会うあの方がどんな人かは知らない。けれど、私の中でその方に対する気持ちが変わったのは確かだった。その方が私の隣に座ってきたのはそんな時だった。私の中で考え方が変わったことと、先日からの罪悪感もあり、私は何となく会釈をした。すると、その方に突然話しかけられたのだ。はじめはとも驚いたが、もともと人と話すのが好きな私はすぐにその方と会話をすることができた。話した内容はあまり覚えていないほど他愛のないことだったが、私が勝手に怖いと思いきこんでいた方が明るくて面白かったことだけは絶対に忘れ

ない。そして、今までの私の思考がいわゆる「偏見」というものだったのだと初めて気が付いた。

「個性」や「多様性」が重要視される現代の中で、私はいくつも「偏見」や「差別」に対して批判する作文を書いた。しかし、私自身が偏見の目で人を見て、勝手に怖がって、失礼な態度を取っていたのだ。そのことに気が付いたとき、素直に「差別」や「偏見」は意外と身近なところにあるのだと感じた。言い訳がましいのは承知の上だが、作文やインターネットで触れる差別や偏見なんて血も涙もない人たちがやっている事だと思っていた。だから、自分がそんなことをしているわけがないと、そう思っていた。そして、この作文を書きながら改めて振り返る中で私が今まで批判してきた人も、偏見や差別をしているという自覚がないのではないかと思った。「無知の知」という言葉どおり、「自分がそんな行為をしてしまっている」という自覚を持つことが偏見や差別をなくす第一歩なのではないだろうか。今は情報化が進み、インターネットなどでも簡単に様々な情報を得ることができるようになった。情報の正誤を確かめながらももっと調べ、自分の身の回りの偏見や差別について考えてみてほしいと思う。もしかしたら、意外と身近なところに潜んでいるかもしれない。最後に、また差別や偏見を批判するような作文になってしまったが、「無知の知」を知れたからには、私自身少しレベルアップできたのではないかと思っている。しかし、私が今までやってきたことは決して許されることではないとも思う。最後の最後に、あの方に伝えたい。

今まで勝手に壁を作っていてごめんなさい。

そして、あの時話しかけてくれてありがとう。

都立桜修館中等教育学校 三年

原田心夏

見えない世界

トンツ、トン、トンツ。駅のホームでそんな音をたまに聞きます。それは、視覚障害者の人が持つ白杖の音でした。

私には、視覚障害者の友達がいます。彼女とは、小学一年生で同じクラスになり、仲良くなりました。学校生活では、彼女は文字の大きく書かれた教科書を使って、皆と授業を受けていました。また、私と同じ習い事だったダンス教室と一緒に通っていました。彼女の見ている世界について興味を持つことはありませんでした。ただ、見え方について聞いたり、想像したりすることはありませんでした。

小学四年生だったある日、授業で「アイマスク体験」というものをしました。友達とペアになり、一人がアイマスクをつけて見えない状態で、もう一人が隣で誘導をして学校内を回るといふものでした。初めは面白そうと思っていました。しかし、アイマスクをした、見えない世界というのとはとても怖かったです。いつもの曲がり角も、教室の机と机の間の幅も、小さな段差も、全然いつものではありませんでした。全てが大きな不安要素でした。

体験後の振り返りで、先生は、「見えない状況はとても怖いものだと思います。大切なのは、その気持ちを知って自分達に何ができるのかを考え、行動することです。」と言いました。また、彼女は「私の見ている世界を皆に少しでも知ってもらえたなら良かったです。助けてほしいとは言わないけれど、この体験を通して、少しでも気にかけてくれたらうれしいです。」と話してくれました。

人は外界から収集する情報の80%以上は視覚から得ると言われています。視

覚障害者は残りの20%から多くの情報を得ていることになりました。では、皆さんも目を閉じてみてください。視覚以外から世界を感じてください。布の擦れる音、クッションの柔らかさ、ヘアオイルの匂い。数秒前まで感じていなかったことに視界をなくしたからこそ、気が付くことができたのではないのでしょうか。彼女は声や足音、雰囲気で誰なのか分かるそうです。80%は見えずなくても、20%から見える世界は私たちが得られるものより豊かなものであるのだと思います。

私も駅のホームで目を閉じてみました。歩く人の距離はすれすれで、なんてことないホームと扉の隙間も、段差もわかりませんでした。こんな場所に来ている視覚障害者の方。白杖を見ても私は、駅員さんがいるから、私自身では何とできないから、そう言い訳をつけて声をかけることをやめていました。ただ、この経験、友達や小学校の頃の経験を中学生になった今なら生かせるのではないかと思います。

次に、白杖を持っている方を見つけたら、「何かお手伝いできることはありませんか」そう声をかけたいです。

障害者の人に声をかけること。それはとても勇気の必要なことだと思います。親切は形として見ることは皆できません。それでも、相手は心の目で見てくれるはずです。相手が「見えない世界」にいたとしても、思いやりを「見える世界」にするべきです。

葛飾区立水元中学校 二年

山田りる

インクルーシブ教育を目指して

数か月前、何気なくニュース番組を見ていた私は、ある特集に目を奪われた。それはインクルーシブ教育についての特集だった。

インクルーシブ教育とは、障がいのある子もいない子も、地域の学校で共に学ぶ仕組みのことで、テレビの画面には、車いすの子、知的障がいや自閉症の子、医療的ケアの必要な子など、様々な障がいのある子供達が、地域の子供達と一緒に遊び、同じ教室で学んでいる様子が映っていた。そのような学校があることを、私はこの時初めて知った。

私には双子の妹がいる。二人とも自閉症でこれまで障がいがあることによつて、いくつもの壁にぶつかってきた。

例えば、私が幼稚園の時だ。妹達とは二歳違いなので、私が年長の年に妹達が同じ幼稚園に入園することをとても楽しみにしていた。けれど、妹達は私の通っていた幼稚園に入園することができなかった。入園の面接の日、面接を終えた両親と妹達が帰ってきた。母はとても悲しそうな顔をしていて「ごめんね。一緒に幼稚園に通うことができなかったの。」と私に謝った。まだ幼かった私は、なぜ一緒に通えないのか理解できなかった。

その後、三人で通える幼稚園が見つかり、新しい幼稚園に通うため、家も引越すことになった。しかし、ようやく通えた幼稚園からも、妹達があと一年で卒園という時に、突然退園を告げられた。障がいがあるため、とても手がかかって大変だからという理由だった。

妹達が年長から通える幼稚園を両親が何とか探して、新しい環境にも慣れて

きた頃、今度は小学校への就学の壁にぶつかってきた。

妹達は支援学校へ通うか、支援学級へ通うかが、なかなか決まらなかった。就学相談にも母は何度も足を運び、最終的に支援学級に決定したのは、入学式の二か月前だった。学校が決まるまで買えなかったランドセルをやつと買うことができた。妹達も鏡の前でうれしそうにランドセルを背負っていた。

私の通っていた小学校には、支援学級がなかった。妹達と同じ学校に通うため、三年生から別の小学校へ転校することになった。私も物心がついていたので友達と別れるのは嫌だった。新しい学校での生活を考えると、とても不安だった。どうして妹達に障がいがあることで私の環境まで変わらなければいけないのかという気持ちと、妹達と同じ学校に通いたいという気持ちでとても複雑だった。

このように、妹達が生まれてから十年の間に、障がいがあることによつて、いくつもの壁にぶつかってきた。私もその度に、妹達は社会から受け入れてもらえない存在なのかと悲しい気持ちになった。きっと障がいのある子供達も、その親やきょうだい児も、私達家族と同じような孤立感や疎外感を感じた経験があると思う。もし当たり前のようにインクルーシブ教育が進んでいたら、そうした壁は存在しなかったはずだ。小さい頃から障がいの有る無しに関わらず地域の子供同士と一緒に過ごすことによつて相手を思いやり、助け合い、お互いを認め合うことがきつとできるようになる。そして、そのような環境で育つた子供達は、障がい者だけでなく、自分とは違う性別や人種、国籍などの多様性を当たり前のように受け入れることができるはずだ。インクルーシブ教育の実現には必要な人員の確保や予算の問題、何より障がいのある人と関わる機会がこれまでなかった人達の不安や偏見など様々な課題がある。いま私にできることは周りの人や友人に妹達の障がいの特性やこだわりなどを知ってもらい、障がいのある人達をもっと身近に感じてもらえるように伝えていくことだ。そして全ての子供達が壁にぶつかることなく一人一人のニーズに合った教育を受けられることができるよう、まずは心の壁をなくしていきたい。いつかインクルーシブ教育が当たり前の社会になるために。

十文字学園女子大学教授

富山哲也

まず、本日発表された主張について、発表順に簡単に講評を述べさせていただきます。

神村雛子さんの「ことは溢れる社会を目指して」では、言葉は時代とともに変化するものだが、相手のことを考えて使うことが大切だと丁寧論じられていました。

小林杏珠さんの「会話の本質」では、初対面の対話で必要なのは互いに深く知ろうとすることだという主張を、語彙豊かに、また個性的な文体で発表されていました。

近藤寧々さんの「祖父から教わった農業」では、野菜を通じた様々なエピソードから、おじい様の豊かな人間性が伝わってきました。近藤さんの「野菜愛」も印象的でした。

堤川琉風さんの「防災への意識」では、震災に関する迫真の描写が特に印象的で、記憶が薄れつつある現在、改めて経験を次代につなげていくことの重要性が伝わってきました。

樋山瑠斗さんの「僕の将来の夢」では、弟妹さんに絵本の読み聞かせをしてあげられる場面が特に感動的でした。中学生が職業について学ぶことの大切さが伝わってきました。

三島穂紀さんの「SNSと気持ちのコントロール」では、SNSの利用が避けられない社会状況の中、「おそろしさ」も含めて慣れていくことが大事だという主張に納得しました。

毛利日鞠さんの「青春取扱説明書、規則改正を添えて」では、主體的に校則の改正に取り組む中で、なぜ規則があるのかを深く考えたことが分かりやすく伝わってきました。

山中帆帆里さんの「人生の通過点、十代 (adolescence) の自分とどう向き合うか」では、「自分に違和感をもつ自分を認識する」という十代の複雑な思索が、適度な身振り等を交えて説明されました。

吉川鳴海さんの「心を彩る年中行事」では、特に節分の鬼を全力で演じるお父様の姿が印象的で、年中行事の意義や魅力が多面的に捉えられていました。

渡邊太さんの「『いじめ』と向き合う『人』と向き合う」では、渡邊さんの相談を受け止めてくださったご両親や先生のような存在の重要性が、ひしひしと伝わってきました。

本年度も多様な問題が取り上げられており、中学生の視野の広がり、関心の深まりを感じることができました。めつたにない特別な経験をしたという内容ではなく、日常的な経験を深く考察した内容が多いという印象でした。また、中学生としての自分自身を見つめた発表も目立ったように思います。このような内容を文章にまとめる上で重要なことは、自分の身近な世界だけでなく、広く社会全体のこと視野を広げて考えてみることです(本大会の作文審査の項目にも、「個人の感想や体験にとどまらず、一般性・社会性があるか。」が設けられています)。例えばある事柄について、周囲や社会が自分が求めているような状況になっていないとき、それに対する不満を表明するだけでなく、その状況に対して自分はどう働きかけるかを考えてみるのが大事になるでしょう。

文章の書き方としては、「構成」についてよく工夫されたものを高く評価しました。東京都知事賞、東京都教育委員会賞を受賞された作品は、読み手(聞き手)を引き込む導入、経験と考察の明快な展開、全体としてのまとまりなどに特に優れていました。一方、文章の最後に余分な内容が付け足されてしまっているような印象を受けるものもありました。今回発表された皆さんは、構成のメモがなくても文章が書ける力があると思いますが、しっかり構成を考えて書くことの大切さを改めて確認してほしいと思います。

口頭の発表については、どなたも聞き手を意識していて、練習の成果が感じられました。その中でも特に聞き手の心を動かした発表は、文章の内容を覚えていることに加え、それを完全に自分のものにする事によって、目の前の聴衆に「語る」様子になっていました。これはとても難しいことだと思いますが、ご家族や先生に録画していただいた映像を見直すなどして、それぞれの発表を振り返っていただければと思います。

さて、今日の発表に至るまでに、ご家庭で、あるいは学校で、生徒と家族の方々、先生方で様々な会話があったことと拝察します。その会話が今日の素晴らしい主張の基盤になっているのだと思います。この会をきつかけにして、発表した生徒さん同士も知り合いになり、ますます豊かな会話の輪を広げていく機会にいただけたら幸いです。以上、大変雑駁ではありますが、私からの講評とさせていただきます。ありがとうございます。



ノンフィクション作家

川内 有緒

本大会は、中学生の皆さんの中にあるさまざまな思いを感じる貴重な機会です。今年、言葉やコミュニケーションをテーマとした作品が多いのが特徴でした。友人や親子での会話、SNSの使い方、語彙が単純化していくことへの危機感を綴ったものもありました。防災意識のあり方、伝統行事の継承、学校のルール策定、本への熱い思いを綴ったものも印象的でした。

いま、言葉が壊れつつある時代です。本来の意味が軽んじられたり、ねじ曲げられたりしており、ひとりの大人としては、言葉を大切に、伝えていく努力をいかねばと思います。みなさんが書いた「主張」もまた、この先に社会を変える力になるかもしれません。どうぞ、書き続けてください。上手である必要はありません。なるべく自分の内側から発する言葉を綴り、語り続けてください。

東京都私立中学高等学校
父母の会中央連合会副会長

立木 里美

中学生の皆さんの原稿もさることながら、書かれた文章をご自身のものとして、しっかりと発表されている姿勢に、とても深い感動と感銘を受けました。

主張の内容には心情や感情に関するものが多く、言葉の使い方について、SNS利用についてなど、中学生らしい苦悩や葛藤を感じ取ることができました。他にも、防災への意識、将来の夢、家族のことなどの発表も、堅実に向き合い自分の考えや思いがとても良く伝わりました。どれも思いやりにあふれ優しさを感じました。

今回の体験は、お一人お一人の胸に刻まれ良い体験として、素敵に成長されることと思います。これからも、身近なところから社会へと視野を広げ、輝かしい未来へ繋げていってもらいたいと思います。

今後の皆さんの更なる活躍を願っています。

東京都公立中学校PTA協議会会長

関口 哲也

新型コロナウイルス禍の制限がない中での開催により、活き活きとした表情豊かさの中から発せられる皆さんの主張に引き込まれる自分を感ぜられる機会となりました。ありがとうございました。

日々の学校、家庭等様々な生活環境の中で、の出来事や心を動かされた事などを皆さんの言葉で綴られた主張は、楽しい笑顔、辛く悩んだ顔、やる気に満ちた顔での光景が目には浮かぶものであり、しっかりと受けとめさせてもらいました。

今後の人生において、数多くの躍動する機会に出会おうと思います。その際には、大いに感動し、悩み、考え、相談して、自らの思いをはっきりと伝えることができる人に成長されることを期待しています。

東京都教育庁指導部 義務教育指導課長

坂本 教喜

日常生活で疑問に感じていることや考えていることに着目して、中学生らしい視点からの分析を通じた具体的な提案や提言でした。また、説得力のあるものとするために、論理展開を明確にしようと、推敲を重ねた様子が伝わってくるものでもありました。

私は、事前に文章を読んでいたことから、「きつとこのように主張をされるのかな」と想像していましたが、見事に裏切られました。壇上で聴衆に対し堂々と述べ、訴えかける一人一人の姿は見事でした。具体的には、審査員を見ながら語りかける姿、抑揚を付けて聞き手のイメージを膨らませる話し方、ジェスチャーを交えて聞き手を引き込む工夫等がありました。

皆さんの主張からは、中学生の若々しさや、現状をよりよくしていきたいという力強い思いが伝わってきます。中学生の今だから感じることに、気付くことなどを大切に、様々なカタチで表現していただく下さい。皆さんの一層の活躍を期待しています。

東京都生活文化スポーツ局 若年支援担当部長

村上 章

『中学生の主張』は、これまでも多くの方々を支えられ、45回目を迎えることができ、今年には、5千作品を超える多くの中学生の声が届けられました。作品を応募し参加してくれた中学生の皆さん、学校関係者の皆様、ご家族の皆様など関係者の方に改めて感謝申し上げます。

作品内容は、家族や友達、社会、将来の夢など多様ですが、一つ一つの作品が中学生らしく素直な感性にあふれるものばかりでした。その中から、10名の中学生が大会に臨み、自分の言葉で堂々と発表してくれました。自分で主体的に考え、発表の筋道を立て、推敲を重ね書き上げた熱い思いであることが、発表している姿から伝わり圧倒されました。そして、東京の未来を担う若い世代に頼もしさを感じることで、うれしい気持ちもこみ上げてきました。

中学生の皆さんには、今後さらに感性と表現力を磨き、自分らしさを発揮して成長して行くことを期待しています。

令和5年度 中学生の主張東京都大会 当日の概要

- 日 時 令和5年9月10日（日曜日）午後2時から午後4時50分まで
- 場 所 東京都議会議事堂1階 都民ホール
- 主 催 東京都
- 次 第 開 会
 - 1 あいさつ 東京都生活文化スポーツ局若年支援担当部長 村上 章
 - 2 中学生の主張 発表者10名
— 休憩（審査）—
 - 3 表彰式
 - （1）審査結果発表・講評 審査員長 富山 哲也
 - （2）表彰状贈呈
 - （3）知事賞受賞者による感想
- 閉 会

○ 審 査 員

《審査員長》 富山 哲也	十文字学園女子大学教授
川内 有緒	ノンフィクション作家
立木 里美	東京都私立中学高等学校父母の会中央連合会副会長
関口 哲也	東京都公立中学校PTA協議会会長
坂本 教喜	東京都教育庁指導部義務教育指導課長
村上 章	東京都生活文化スポーツ局若年支援担当部長

○ 審 査 基 準

（1）論旨・内容について

- ア 中学生らしい新鮮な主張や新しい視点があるか。
- イ 個人の感想や体験にとどまらず、一般性・社会性があるか。
- ウ 提案や提言を実現・実践する意欲が感じられるか。
- エ 論旨が一貫し、構成がしっかりしているか。
- オ 表現が適切であるか。

（2）論調・態度について

- カ 聴衆に共感と感動を与えているか。
- キ 説得力があるか。
- ク 熱意と迫力があるか。
- ケ 主張の内容に合った伝え方・態度であるか。

【参考】令和5年度 中学生の主張東京都大会 募集概要

1 応募資格

令和5年4月1日現在、東京都内に在住または在学の中学生及びそれに相応する学籍又は年齢の者。

※国籍は問わないが、応募作品については日本語で発表できること。

2 テーマ

1 社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。

2 家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど。

3 テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など。

上記のような内容で、心からの思い、考えたことや感銘を受けたことなどを、少年らしい自由でユニークに、飾り気のない言葉でまとめたもの。

3 締切

令和5年7月12日（水曜日）

4 審査及び表彰

主催者において、大会の前に発表者（出場者）10名及び奨励賞10名を選考し、8月中に在籍校に結果を通知する。大会当日は発表者10名が、応募した原稿に基づいて5分程度の発表を行い、審査員の協議で知事賞（1名）、東京都教育委員会賞（2名）、優良賞（7名）を選考した後、奨励賞を含む各受賞者に対する表彰を行う。

5 その他

(1) 知事賞受賞者を、独立行政法人国立青少年教育振興機構が主催する「第45回少年の主張全国大会～わたしの主張2023～」の出場候補者として推薦する。

(2) 応募者全員に、参加賞として記念品を贈呈する。

(3) 受賞作品を発表文集にまとめ、学校等へ配布する。

(4) 受賞者の写真、氏名、学校名、学年及び作品名を、東京都のホームページと発表文集に掲載する。

応 募 状 況

1 今年度の応募状況

(単位:人、団体)

応募者数				応募団体数
1年生	2年生	3年生	計	
895	1,905	2,497	5,297	50

2 過去の応募状況

(単位:人、団体)

年度	応募者数	応募団体数	年度	応募者数	応募団体数
昭和 54	219	-	13	797	41
55	184	-	14	562	37
56	265	37	15	736	48
57	454	40	16	1,961	60
58	142	27	17	1,552	58
59	169	39	18	2,230	84
60	230	40	19	1,919	86
61	289	58	20	2,276	79
62	509	79	21	4,105	105
63	527	80	22	3,153	98
平成元	742	102	23	1,864	77
2	326	70	24	3,316	93
3	355	67	25	3,739	72
4	472	69	26	8,446	97
5	385	36	27	9,983	95
6	280	53	28	8,620	95
7	259	48	29	7,781	70
8	230	40	30	6,878	62
9	500	58	令和元	5,784	52
10	739	45	2	6,482	65
11	491	37	3	5,932	57
12	639	42	4	5,647	39

過去の入賞者（直近3年間）

令和2年度（第42回） 令和2年9月13日・東京都庁大会議場

賞	学 校 ・ 学 年	氏 名	作 品 名
知 事 賞	葛飾区立青戸中学校・1年	松本直汰郎	普通とは何か
東京都教育委員会賞	北区立浮間中学校・2年	大宮 幸穂	舞台上上がる
	板橋区立志村第四中学校・3年	鹿島 菜乃	魔法
優 良 賞	世田谷区立芦花中学校・3年	太田 佳奈	見えない優しさ
	あきる野市立増戸中学校・2年	奥山 朋佳	「私の祖父母」
	立正大学付属立正中学校・2年	神本 真宏	感謝の気持ち
	立川市立立川第一中学校・2年	黒澤 美春	思い切って行動に移そう！
	学習院女子中等科・2年	高橋 亜依	見えない相手からの言葉の暴力
	目黒区立大鳥中学校・3年	西田 圭吾	レッツチャレンジ精神
	品川区立荏原第一中学校・2年	藤沢 亮吾	学校休業で僕が考えた事・感じた事

令和3年度（第43回） 令和3年9月12日・東京都庁大会議場

賞	学 校 ・ 学 年	氏 名	作 品 名
知 事 賞	東京都立武蔵高等学校附属中学校・3年	坂口 礼佳	兄の話
東京都教育委員会賞	あきる野市立増戸中学校・3年	奥山 朋佳	未来へつなぐ
	板橋区立志村第四中学校・3年	菊池 香帆	好きと伝えられる社会へ
優 良 賞	東京都立葛飾ろう学校・3年	大澤 美輝	差別の無い社会を
	大田区立大森第八中学校・3年	鹿島 靖媛	一人一つの命
	國學院大學久我山中学校・3年	佐藤瑛太郎	「勇気的一步」
	立川市立立川第二中学校・3年	下津浦美結	矛盾する「正しい」
	葛飾区立金町中学校・1年	住吉 拓己	2030年に向かって
	世田谷区立芦花中学校・3年	乳井 美桜	地球のためにできること
	立川市立立川第八中学校・3年	吉田 琉生	本当のバリアフリー

令和4年度（第44回） 令和4年9月11日・東京都議会議事堂都民ホール

賞	学 校 ・ 学 年	氏 名	作 品 名
知 事 賞	大田区立大森第八中学校・3年	向井 琴羽	理解のある未来を信じて
東京都教育委員会賞	都立武蔵高等学校附属中学校・3年	辻谷和香奈	欲望と幸せ
	東京学芸大学附属世田谷中学校・3年	戸田 幹子	あなたのそばに
優 良 賞	都立武蔵高等学校附属中学校・3年	吾妻 真希	見えない壁を越えて
	立川市立立川第二中学校・3年	片山 菜緒	壁をなくす
	國學院大學久我山中学校・3年	金子 智春	実店舗とネット通販
	東京電機大学中学校・2年	鈴木 月菜	買い物難民
	立正大学付属立正中学校・1年	ソン 楽人	キャッサバ
	中村中学校・1年	中嶋 乃菜	チャレンジド
	都立武蔵高等学校附属中学校・3年	藤田 紗帆	優しさの輪

令和5年度 中学生の主張東京都大会 動画配信

<令和6年10月末まで公開>

大会当日の様子を東京都公式動画チャンネル「東京動画」で公開しています。
ぜひ、発表者の皆さんのスピーチをご視聴ください！

① 開会・挨拶



<https://tokyodouga.jp/afetiddicxo.html>

② 発表



https://tokyodouga.jp/zc_qqeinamu.html

③ 表彰式



<https://tokyodouga.jp/mh8r15zf824.html>

受賞おめでとうございます



受賞者と審査員の皆さん

今年度も、中学生の皆さんから、たくさんの素晴らしい作品をお寄せいただき、ありがとうございました。応募された方々、大会に参加された方々及びご協力いただいた皆様に心より感謝を申し上げます。

この文集は、東京都公式ホームページからもダウンロードできます。

【中学生の主張東京都大会】



https://www.seikatubunka.metro.tokyo.lg.jp/tomin_anzen/jakunenshien/chiiki-ikusei/ikusei-jigyuu/syucyou/index.html

登録番号 5 (63)

令和5年11月発行

令和5年度 中学生の主張東京都大会 発表文集

編集・発行／東京都生活文化スポーツ局都民安全推進部若年支援課
〒163-8001 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
都庁第一本庁舎北塔34階
電話 (03) 5388-3098

印刷／正和商事株式会社

〒161-0032 東京都新宿区中落合一丁目6番8号
電話 (03) 3952-2154



本紙の再生紙含有率は20%以上です



リサイクル適性 (A)

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。